

## 「国際文化関係史と長崎・平戸」

東京大学・早稲田大学名誉教授 平野健一郎  
東洋文庫常務理事

尊敬する入江昭先生を、現在たまたま職を得ております東洋文庫の一人として、大好きな長崎大学にお連れすることができたことを、長崎大学の皆様とともにうれしく思います。強いメッセージの含まれた入江先生のお話にどこまでつながるかわかりませんが、国際文化関係史の視点から、私の大好きな長崎・平戸についてお話しをしたいと思います。

### 1. 国際文化関係史とは

人と人、文化と文化の国際関係 「今の世界の国際関係はどうしてこうなっているのだろうか」。21世紀になってより平和になると思ったら、何だか逆の方向へ行っているような世界を見て、皆さんもこのような疑問を感じておられるのではないかと思います。「国際関係はどうしてこうなっているのか」を考えていくと、国際関係は国家間関係だけではないということに気がつくと思います。国際関係イコール国家間関係ではない。国家間関係だけでなく、人々が創っている国際関係があり、それが実は歴史を通じて大きくなってきて、21世紀はそれが最も大きくなる時代であるはずなのですが、一見そうは見えていないところがあるのかもしれません。

見方を少し変えて、人々が創っているものは何かといいますと、それは人々がそれぞれ生きていくために必要なものとして創り出す文化です。人々が創る国際関係とは国際文化の関係であると考えたいと思います。「歴史が現在を創る」ものですし、「文化は歴史を経て創られるもの」ですから、現在の我々は歴史と文化の中に生きています。歴史と文化の両方を合わせて考えるために、国際文化関係史という方法が生まれます。今の国際関係がどうしてこうなっているのかを考える一つの方法が国際文化関係史です。

国境を越える文化と文化の関係 国際文化関係を言い換えると、国境を越える文化と文化の関係ということになります。その文化を創るのは人々ですから、端的には、国境を越える人々と人々の関係という国際関係の側面を重視することになります。実際に、人々あるいは文化は国境を越えて接触を繰り返してきましたし、今も頻繁に接触しています。もっと広くいって、人々が境界を越えている

るな関係を創り出すというのはどういうことかといえ、お互いの生き方・文化に影響を与え合い、影響を与え合うことによってお互いの文化に変化をもたらします。そのような現象を文化人類学や国際文化関係史では「文化接触」と呼び、その「文化接触」によってそれぞれの文化が変わっていく側面を「文化変容」と呼びます。もちろん、異なる文化が互に変化を与え合いながら接触を続けることはトラブルも起こします。文化と文化の間で衝突や摩擦が起きることも考えておく必要があります。国際文化関係史ではそういう考え方をとる必要があります。

地域と地域の関係 国際文化関係史の見方で国際関係の歴史を見ますと、中央と中央だけの関係が国際関係ではないということが浮かび上がってきます。地域と地域の間にも人々が創り出す文化の関係があり、その歴史の積み重ねがあることとなります。国家間関係、国際政治といいますと、中央政府と中央政府の関係だけ、国家と国家の間の抜き差しならない戦争、紛争というような関係に重点が行ってしまいがちですが、国際文化関係あるいは国際文化関係史として国際関係を見ますと、人々が主役であり、そのことはすなわち、具体的に地域と地域の関係でもあるという見方ができるようになります。

地域と地域の関係というのは、普通一般にいわれる文化交流以上のものだといえると思います。あとで具体的にお話しするのが長崎・平戸のケースですが、国際文化関係史の見方を取れば、暮らしの中で人々が接触する、あるいは文化が接触すると考えることができます。暮らしの中での文化接触、それによって起こる文化変容、ある時はそれによって起こる文化摩擦を考えてみる、そういう学問が国際文化関係史です。

## 2. 経済的な国際交流

物の交換 国際文化関係史の視点で見えていくわけですが、今日は経済的な交流に焦点を当ててみようと思います。経済的な国際的交流といいますと、交易とか、貿易とか通商といわれます。共通するのは、まずは物の交換だということです。物を増やしていくとか、境界を越えて新しい物を獲得することによって文化が変わっていくことがあるわけです。

交易、貿易、通商を「物の交換」と言い換えますと、一番簡単なのは、他の人々が持っている物を奪うこと、略奪です。略奪では摩擦が大きすぎるというので、こちらからもそれに対応すると思われる物を提供するのが物々交換です。お金を使わずに物を獲得する方法としては、略奪と物々交換が行われるわけです。略奪にしても物々交換にしても、そこに何らかの取引が行われますから、人と人の接

触という現象も起こります。そうすると、人と人との関係ということになって、国際文化関係が生まれていく方向につながります。

沈黙交易 物の交換には、普通は人と人との接触が伴うと考えておきたいと思います。その次には、人が移動する現象が起こると思います。人の移動を言い換えますと、短期的には、その生活圏に暮らしていない人が境界の外からやってきて、物の交換、取引に携わることになり、言い方を換えると、それは外部からの人の「訪問」になります。取引の場になる空間の人々にとっては、普段いない人が訪問してくることになります。取引が長引きますと、異界の人々だった人たちが訪問から「滞在」に変わる現象につながります。

そういう現象につながる人との接触をなるべく避けて、物の交換だけをする方法として、原始以来、略奪、物々交換のほかにもう一つ、「沈黙交易」あるいは「沈黙貿易」と呼ばれる方法が、人々の集団の間で行われてきました。その沈黙交易というものに注目してみようと思います。沈黙交易が成立するためには、デポと呼ばれる中立地点が必要です。人の接触なしに物だけ交換しようというわけですから、その物を置いておく場所としての中立地点が必要になります。できれば仲介者がいることが、よりよい取引が行われる条件になります。それがやがては中立的な市場を創り出す、より一般的に市場制度のもとになるともいわれてきました。

しかし、沈黙交易自体は時間差交易でもあるわけで、すぐに対価を求めるわけではないのです。相手の集団が何かこういう物を欲しがっているのではないかと考えて、「これはどうですか」と置いておく。音を出して「置いておいたよ」という合図、挨拶をすることがあったようです。それを聞いて、その人たちが去ったあと、その中立地点に受け取る側の人が行って、それをもらって帰ります。そこですぐにお返しを置く必要はないわけです。いくら時間がたってから、今度はこちら側の人、相手が欲しいだろうと思う物をそこへ持って行って置いとくと、やがて相手を取りに来るということで、長期的にお互いに利益になるような取引ができます。言い換えると、お互いに相手が気に入るだろうと思うプレゼントを差し出し合うという関係です。お互いに報い合うということで、これを「互酬」の関係と呼びます。やがて、この沈黙交易から、外からやってきて取引に携わる人々を保護する、客人として保護するとか、あるいはお互いにより取引をした喜びで歓待し合うといったような、保護＝歓待の仕組みも出来上がったろうと思われる。これは、人々と人々の間の平和な友好関係です。

ところで、先ほど、学部長の中村則弘先生から偶然に私のことを「カール・ポランニーの翻訳者でしょう」と言っていました。実は、それを予想せずに

今日の話を組み立てましたが、パワーポイントを準備していて、自分が昔、カール・ポランニー（Karl Polanyi）を翻訳したことを突然思い出し、そういえばポランニーに「互酬」という言葉があったなど、ここに書き出した次第です。

ポランニーが出たついでに、もう一人、あとでも触れるもっと偉大とみなされる外国人をここで引き合いに出させていただくと、この互酬が人類史における平和につながると思ったのが、イマヌエル・カント（Immanuel Kant）でないかというのが私の考え方です。カントの『永遠平和のために』の中には、国家間の平和を論じているところが多いのですが、その議論を追っていくと、人々の間の平和の議論に変わっていきます。そこに互酬とか、あるいは原始の時代に人類が行ってきた沈黙交易といった現象を永遠平和の源流として見ることもできるかもしれないと思うのです。こういうことをお話ししておりますと、私の期待では、皆さんの間に長崎の出島が浮かんでいるのではないのでしょうか。長崎の出島をどう考えるかということで、本題に移りましょう。

#### 4. ジョン・セーリスの平戸来航

ジョン・セーリス 長崎と申し上げながら、実は平戸のお話をさせていただきます。1613年に、ジョン・セーリス（John Saris）というイギリスの船乗りが1艘の船で、70人～80人の船員と一緒に平戸にやってきました。ジョン・セーリスは1579年か1580年にロンドンで生まれて、1643年に亡くなったのですが、イギリス東インド会社から日本へ派遣された最初の船の司令官だった人で、当時のイギリス国王ジェームズ1世の国書と徳川家康の返書を交換することに成功しました。

このジョン・セーリスが、その時の航海でつけていた航海日誌があります。それを本にしたのが *The First Voyage of the English to the Islands of Japan* ですが、今は『日本渡航記』というタイトルの日本語訳もあります。原本には異本といいますが、それぞれオリジナルですが、いくつかのバージョンがあります。私の判定で最も重要と思われるバージョンを東洋文庫が所蔵しています。これを使いまして、ジョン・セーリスの平戸来航のお話をしたいと思うのです。

セーリスは、イギリス東インド会社の第8回東洋航海の司令官として、1611年4月13日にイギリスを出帆しました。この時は、クローブ号など3隻の船を率いていました。今のジャワ島の、ジャカルタの少し西にありますバンタムという港を基地にして、そこから北上して、その時は旗艦クローブ号1隻だけで日本を目指します。そして、1613年6月11日に、平戸に到着しました。当時、セーリスは33歳か34歳の脂が乗った船長でした。

Mr. Selden's Map of China クロブ号は600トン～800トンぐらいの帆船でした。このような船がどのように平戸にやってきたかという、すでに海図を使っていたのです。スライドでお見せしている地図は Mr. Selden's Map of China と名づけられ、現在はオックスフォード大学ボードリアン図書館が所蔵・公開していますが、まさに当時のもの、どころか他ならぬセーリスが東南アジアから持ち帰ったものと鑑定されています。中国地図ということになってはいますが、中国はそれほど正確に描かれていません。大陸部の陸上は歪んで、あまり正確ではありませんが、フィリピンや琉球など、島々は詳しく描かれており、南シナ海、東シナ海、東シナ海、東シナ海を渡っていきますと、右上（北東）に平戸があります。よく見ていただくと、海上に線が幾つも引かれています。これが船の航路を示しています。福建省の沖合辺に航路が集まっているポイントがあり、そこまでずっと上がって行って、そこからさらに羅針盤に従って東北東に行くと、平戸に着くというような地図です。

このような海図を使ったのでしょうか、セーリスは比較的簡単に平戸に到達しています。なぜ平戸へ行ったのかという、1600年に豊後に漂着したウィリアム・アダムズ（William Adams、三浦按針）が故郷やバンタムに書いた手紙で、日本には通商の機会があること、彼が家康にかわいがられていることが伝わっていました。それで東インド会社が、「日本と貿易をしようではないか。ついてはセーリス、お前が行ってこい」という話になったのです。当時の平戸は「西の都」といわれました。すでに15世紀から東アジア海域の中心的な港の一つとして栄えていたわけです。この海図もそうですが、主に中国の船乗りたちがこの海域で活動していました。世界史で習ったように、一般的には、当時倭寇が活躍していた海域です。そこで西の都として栄えていた平戸は、新たにその海域に登場したヨーロッパの船乗りたちには、「フィランド」という、なかなか素敵な名前でも知られるようになりました。先ほどの地図にも「Firando」と書き込まれています。

## 5. セーリスと松浦鎮信の交歓

セーリスと鎮信 当時、その平戸の藩主は、松浦鎮信という72歳の引退した老王と、その孫の隆信でした。

さて、1613年6月11日に平戸に入港したクロブ号には、セーリスのほかにナンバーツーのリチャード・コックス（Richard Cocks）など、イギリス人が73人ほど、スペイン人と日本人が1人ずつ、黒人が5人乗っていたそうです。おそら

くスペイン人と日本人がパイロット役をして、最後は平戸まで案内したのでしょう。長崎に寄ろうとしたが、何かで寄れなかったという説もありますが、セーリスの航海日誌によれば、割合ストレートに平戸に入っています。ということは、平戸が当時は非常に栄えていたことを裏づけていると思います。

セーリスが礼砲を鳴らして入港を知らせると、間もなく、老王（法印様）と孫の「トネサメ」（「殿様」です）が40隻ほどの船を引き連れて、向こう岸からクローブ号に近づいてきました。私が特に注目しているのが、セーリスと松浦鎮信の交歓といえますか、「いい関係」なのですが、それが生まれる大事な瞬間ですので、資料のこの部分を読ませていただきます。シェイクスピア時代の英語で書かれているので、なかなか難しいのですが、日本語の名訳がありますので、その名訳のその部分を読ませていただくと、平戸に入港したときの描写は次のようになっています。

午後三時、潮が引いてしまったので、さらに進むことができず、平戸の手前半リーグの所で投錨した。予は投錨に際し礼砲一発を射たしめた。・・・しばらくののち、予は法印様と呼ばれる老王及び彼の孫トネ・サメ（殿様）によって訪問を受けた。・・・

彼らは片舷十ないし十五本の櫂によって漕がれるボート・・・四十隻に付き添われていた。船に彼らが近づいたとき、王は彼自身と彼の孫の乗っている二隻以外のすべての舟は後ろになるようにと命じ、彼二人のみ船へ入って来た。・・・

2人は、ほかの船は全部待つようにいって、自分たちが乗った船だけで近づいてきたのです。そこには敵意も警戒心もまったくないわけです。一種の沈黙交易に近いような情景が創り出されたのではないかと思います。

饗応・歌舞音楽・贈り物　そこでセーリスはどうしたかといいますと、その2人のために、饗宴と立派な音楽の演奏を用意しておいたほかの船室に案内したそうです。それが彼らを非常に喜ばせたと記録しています。セーリスは船にリユートを載せていて、これを彼自身が演奏したのかどうかは私の今後の研究課題なのですが、とにかくいきなり音楽で歓迎しているのが大変素晴らしいと私は思っています。松浦藩の藩主たちは、セーリスに歓迎の辞を述べて、「親切にして自由なる饗応」を約束してくれました。そこでセーリスは数種類の缶詰めをガラス器に盛って王をもてなしました。2人は多大の満足を表し、また立派な音楽の演奏を多大な喜びをもって受け入れました。藩主たちが帰ると、今度は家来たちが、

ぜひ船を見たいということで押し寄せてきて、セーリスたちが音を上げるくらいだったという情景が描かれています。最初の出会いに交歓と歌舞音楽が大きな役割を果たしました。

歌舞音楽についてはさらに面白いことが書いてあります。翌日また殿様2人が船を訪れ、その時には婦人4名を同行してきました。婦人たちは少し恥ずかしそうにいましたが、鎮信が彼女たちに「陽気にやれ」と命じました。女性たちはいろいろな歌を歌って、楽器を演奏しました。その楽器の一つは、セーリスたちの琵琶、リュートに大変似たものでした。これは三味線だったと思います。セーリスが残した記録には、自分たちと同じように左手で指を動かして、右手では象牙のバチで打つという演奏スタイルだったと描写されています。「手拍子を打ち、我々のものによく似た音符を付した本で奏で、歌い、その音楽で自分は大層なぐさめられた」と記録しています。

歌舞音楽、さらに、缶詰めでご馳走して喜ばれたこともあります。その後もしょっちゅう王様たちが船にやってくるし、今度はセーリスが上陸して殿様にもてなされることもありました。そのたびにプレゼントを交換することもありましたので、両者の交歓というのは、今日でいえば、国際交流の、どちらかといえば形式的なパーティーに似たところもあったのではないかと思います。これが両者の間の交流のスタートとして非常によい効果をもたらしたのです。

カントの訪問権 カントの『永遠平和のために』の中に「訪問権」という概念が出てきます。この訪問権とは何か、カント自身が「訪問権とは、よその国に行ったときに、その国の人々から敵としての取り扱いを受けない権利である」といっています。ただし、これは訪問の権利であって、滞在の権利ではないともいっています。訪問と滞在は違う、とカントが指摘していることに気をつけたいと思います。この訪問の権利は、「すべての人間に、彼らが地球表面の共同所有の権利に基づいて互いに友好を結ぶために、等しく属するものなのである」と述べています。あくまでも相手の国の領土を踏んだという理由だけで、敵の扱いをされないことです。

地球の表面には、当時まだ人が居住し得ない部分、つまり海と砂漠とがあって、そういう訪問権を相互に行使することによって生まれ得る友好関係を遮断していることは事実でした。しかし、船とラクダ、ラクダを「砂漠の船」と言い換えています。その船とラクダによって、この無主の領域を超えて人々が互いに接近し、人類に共通に属しているこの地表の権利を、可能的な交通のために利用することも可能になるだろう。そうすると、海と砂漠は、遠く離れている大陸の間でも平和な関係を結ばせ、その関係が最終的には公的に法的なものとなって、カン

トが目指す世界公民的体制に人類をより近づけることも可能にするような空間だということになるわけです。

## 6. 日英通商—セーリスと鎮信、家康

セーリスと鎮信 次に、セーリスと鎮信や家康の間にどういうことが起こったのか、つまり、日本とイギリスの間の通商についてかいつまんでお話ししたいと思います。

ウィリアム・アダムズの情報で、イギリス側の東インド会社やセーリスたちは対日貿易の機会、家康によるアダムズの寵遇を知っていたわけです。セーリスたちの平戸到着の翌日の6月12日には、鎮信がアダムズを平戸に呼ぶ手紙を出しています。この時、鎮信はアダムズが浦賀か江戸に居ると思っていたのですが、家康がいる駿河にいました。) やがてアダムズが駿河から平戸にやってきて、セーリスは鎮信から船を何艘も出してもらおうとか、おつきの侍もつけてもらうというよい扱いを受けて、アダムズと一緒に8月に駿府へ向かいます。そして、9月8日には家康に拝謁し、ジェームズ1世の親書を手渡します。そのあと、今度は家康から「江戸に行って、息子の秀忠にも拝謁してこい」といわれ、移動の便宜を図ってもらい、江戸に向かいました。江戸城で秀忠にも拝謁して、帰りにまた駿府に寄り、家康からイギリス国王ジェームズ1世に宛てた返書もらいます。それと同時に、通商の特許状を受けることもできました。京都では家康が命じておいたジェームズ1世に届けるべきお土産も受け取りました。家康のプレゼントは金屏風でした。

平戸に英国商館 11月に、セーリスが平戸に戻ると、すぐに関係者全員の会議で平戸に商館を設置することを決定します。商館を設けるのに最適の地は浦賀だということはセーリスも知っていました。アダムズが浦賀に領地をもらっており、江戸の入り口ですからそちらのほうが立地条件がよいことは知っていたのですが、結局、平戸に戻ってきて、平戸にイギリス最初の商館を設置することを決定します。

これは結局、松浦鎮信・隆信の2人とセーリスの間に非常に仲のよい関係が創られていたために、その交流の成果として平戸に商館が置かれることになった側面があるといってもよいと思います。もちろん、当時、平戸は貿易の中心地だったことでもあります。かくて平戸がイギリス商館を獲得することになった次第です。この時には、オランダ商館もすでに平戸に造られていました。

商館設置が決まると、セーリスはすぐにバンタム、さらにイギリスに戻るこ



に決め、12月5日に平戸を出発します。考えてみると6月から12月までのわずか半年の訪問と滞在で、日英間に初めて交易を開くという快挙を成し遂げているわけです。大変優秀なセールスマンであったように、私はセーリスを想像しております。

ジェームズ1世と家康の親書交換 ジェームズ1世と家康の間に親書の交換が行われましたが、ジェームズ1世からの手紙は「高貴にして強大な日本国皇帝へ」というタイトル、それに対する家康の返事は「インガラテイラ国王貴下」と題されていました。それを両方並べてみますと、お互いに通商貿易を望み、そのための安全と自由を相手側に提供してほしいとっていますし、それを提供しますとっていました。そういう意味で、松浦藩だけではなく、家康が支配下に治める日本全体とイギリスの間に相互性の関係が打ち立てられました。それから、相互に相手を賞賛し、また相手に感謝をしています。ほとんど同じ表現でそれをやっています。ということで、日英の両者の間に対等性も認められると思います。

そして、双務的な最恵国待遇をお互いに与え合っているという平等性も認められます。家康は自分の統治下の領域のどこであれ、イギリス人がもし罪を犯しても、それはイギリス人に裁かせるのと約束しました。ジェームズ1世も、もし日本人が貿易を求めてイギリスにやってきたら、同じ待遇を日本人に与えるといいました。治外法権をお互いに認め合っているということで、良好な最恵国待遇です。250年後に、アメリカをはじめとする欧米の列強と、断末魔の徳川政権が結んだ不平等条約とは対照的な、相互性、対等性、平等性を持った貿易関係が創り出されようとなりました。

カントは、『永遠平和のために』の中で、通商が国際交流を呼び起こし、それが平和につながると述べています。民族間の通商において、広くかつ遠く求められた物品—具体的には塩と鉄を指しています—がある、それを求めることによって、彼らは初めて相互に平和な関係に入り、さらに遠隔の人々とも互いに理解し合い、交際し、平和な関係に導かれたのであると、通商が世界平和につながることを歴史的な事実として指摘しています。

## 7. 平戸におけるセーリス、イギリス商館員たち

船上から陸上へ（訪問から滞在へ） 平戸でセーリスやイギリス商館員たちはどうだったのでしょうか。最初はみんな船の上にとどまっているわけですが。これは、陸に上るといろいろ紛争が起るので、当時の船員たちの間の決まりだったようです。訪問が長期化すると取引が盛んになることもあり、陸上に上がるよう

になります。訪問から滞在に移っていくことになります。

その間に、いろいろな経験をします。整理すると、まず、何人かのイギリス人が平戸、駿河、江戸の間を往復するわけですが、その間の見聞がセーリスの『日本渡航記』の中にいくつか書いてありまして、非常に興味深いものです。博多が大変立派な町だということがきちんと記録されていたりします。一つ気になることは、博多でも大阪でも経験したのですが、主に子どもたちが自分たちの後ろを追い掛けてきて、「トシン、トシン」あるいは「コレ、コレ」と叫びながら、時には石を投げつけたりすることがあった、というものです。これは「唐人（とうじん）、唐人」ということです。異人のセーリスたちをはやし立てるのに、唐（から）の人（外国人）という意味で使ったのだと思います。これが差別や排斥だったのかどうか、今のわれわれからしても大きな問題になるわけですが、私は少し身びいきですけれども、これはあくまでもはやし立てる行為であって、大人が止めなかったという記述もありますので、要するに珍しい人たちを歓迎する行為の一つだったのではないかと思います。ほぼ同じ時代に描かれた『洛中洛外図』を探しますと、京都の風景の中に南蛮人が描かれているところがあります。南蛮人を囲んで子どもたちがはやし立てて、賑やかにしたり、挙句には大人も仮装してお祭り仕立てにしてしまうということがあったのだと思います。

マルチエスニックな平戸の町 もっと重要なのは平戸で、彼らがだんだん日常生活をするようになって、滞在型になるわけです。そうすると、平戸の住民たちとの接触が増えていきます。実際に、防火訓練とか犯罪予防とかにイギリス商館のメンバーも参加するように求められて、町内活動と一緒に参加しています。やがて、平戸の一部ですが、混住・雑居の状態が実現します。さらには国際結婚も起こり、混血児も生まれるようになっていきます。確かに混血児の悲劇も生まれ、混血児たちがジャワに送られる「じゃがたらお春」の話にまでなるのですが、渡英してイギリスの市民権を取得し、ケンブリッジ大学の学生になった平戸生まれの日英混血児もいました。それを少し一般化すると、滞在型になって、そのようになっていったということでしょう。

しかし、平戸の町では、イギリス商館員たちは基本的には歓迎されています。交易のためということが基本的にはあったと思いますが、彼らが見慣れた風景になってくるということもあったでしょう。そうして平戸は一瞬ですけれども国際都市になりました。しかも、ここが現代的にも重要なところだと思いますが、インターナショナルな国際都市ではなく、マルチエスニックな、多文化・多民族的な国際都市になったのです。たとえば秋祭りを藩主が催すと、村人たちが見物にやってきます。セーリスは江戸に出張して留守でしたが、ナンバーツのリチャー

ド・コックスなどが招かれて、侍たちと一緒に晩餐会のようなことをします。それを人々が見物するという風景もありました。

当時の平戸にマルチエスニックな町があったことを何よりも証明しているのが、『外国人の図』屏風（松浦史料博物館蔵）ではないかと思います。平戸に行かれた方は、平戸大橋を渡ると間もなく、国道沿いに置かれた『外国人の図』というタイトルの壁画をご覧になったと思います。これはけっして異国趣味の見世物ではありません。よく見ると、イギリス人は「エゲレス人」と書いてありますけれども、その隣りの中国人と呼ばれそうな人は、「漳州人」となっています。「漳州」というのは、先ほどご覧いただいた南シナ海・東シナ海の間で、海の交通路の中心点になっていたポイント近くの沿岸の大きな町の一つです。そこから来た人たちが平戸で交易をやり、滞在していたことを表していると思います。ほかの人たちもエスニックな呼び名で記されています。

今はもう英国商館はなくなりました。結局、10年しか続きませんでした。1623年に英国商館は撤退しました。直接的にはオランダとの競争に負けて、取引にあまり成果がないので撤退を決定したのですが、もっと大きくは、やはり鎖国が始まったからです。奇しくもセーリスたちが駿府から戻ってくる日に、家康がキリシタンの追放を始めたことがセーリスの耳にも入る、そういう時代でありました。

## まとめ

最後に、鎖国という状況、鎖国の時代に入ります。英国商館が撤退したあと、結局、オランダ商館も平戸から長崎へ移らざるをえなくなりました。私が平戸に描いた理想図も鎖国であつという間に崩れてしまったとお考えになったと思います。結論として鎖国の意味を考える必要がありますが、その前に、長崎を考えるために平戸を考える意味をまとめておきたいと思います。

1639年までの平戸と1641年以後の長崎はつながっていますが、対照的な点もいくつかあります。一つは、平戸が小さな藩によって統治され、支配者が海外貿易の利を知り、外に対して開放的で自由だったことです。それに対して、長崎は江戸幕府によって直轄され、長崎奉行によって管理されました。二つ目は、平戸では国際貿易が当事者たちの自由に任されました。それに対して、長崎の出島は、人と人の接触をゼロに近づけるという点でその起源を辿れば、沈黙交易のデポに遡るかもしれませんが、現実には極度の管理貿易が行われる場所でした。三つ目に、平戸では外国からの訪問者が滞在者になると、雑居を許されましたが、長崎では出島と外国人居留地に厳しく制限されました。このほかにも宗教問題など、平戸

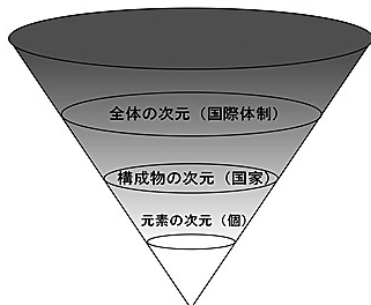
と長崎の間には、重要な共通点と相違点があると思います。それらを含めて、前史としてでも平戸を研究することが長崎をより深く理解することにつながるのではないのでしょうか。

さて、鎖国の意味ですが、カントはとても見通しのよい人で、『永遠平和のために』の中で、日本と中国の鎖国政策を賞は賢明だったと述べています。それはなぜかといいますと、西欧列強が貿易ではなく略奪に走るようになったからで、カントはそれに対抗するためには鎖国をする以外になかったと認めたのです。さらに、カントは言語と宗教の相違を否定はしていません。むしろ、言語と宗教が違うことによって、民族を一定程度に分けるのは悪いことではなく、お互いに文化を向上させ、さらには相互交流によってもっと大きな文化を向上させて、より大なる合致への接近をもたらすことができるはずである、そのことが世界平和が大事だという理解を増やすはずであると述べています。

以上お話ししたことを、私なりに現段階で国際文化関係史の観点からまとめるために、カントの永遠平和の思想を図示しますと、それはこのような3層の構造を持っていたと考えます。3層の一番下の層は元素の次元、これを具体化すれば、人々一人一人、個の次元です。そのかなり上の方に、全体を構成する主要な構成物の次元があって、具体的には、近代では国家のレベルに相当します。カントは、その国家が共和制になることを世界平和のための第1要件としました。そして、第2要件として、全体の次元で国家の間に平和条約を結んで、国際的な体制を創ることを挙げたのです。

私は意図的に、この全体の次元を円錐の図の一番上には置いておりません。天井はもっと高い所にあると考えています。そして、そこに元素の次元一個の次元一と、最も大きな全体の次元との通じ合いが生まれることによって、世界平和に近づいていくことになるのではないかと、そのようにカントは考えていたのではな

カント『永遠平和』の三層構造（図）



いか、というのが私の最近の理解であります。平戸を何回か訪ねることによって  
こういう理解に到達することができたと思っていますが、まだ研究課題がたくさん  
ありますので、これからも平戸研究を続けたいと思っています。

以上、ご清聴ありがとうございました。